
悪魔な天使と天使な悪魔（仮）

オレオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔な天使と天使な悪魔（仮）

【NZコード】

N4564T

【作者名】

オレオ

【あらすじ】

普通な主人公と悪友と双子を中心のコメディー系短編小説です。

(前書き)

初投稿です。一応「れをあまり変えずに連載していきたいと考えています

【?/?/?】

ちゅんちゅん。

ズズメ?の鳴き声が聞こえる4月下旬。

俺この時期好きなんだよなあー。だつて暑くもないし寒くもない最高だよね?

なにより昼寝にはちょうどいい温度だよね?
しかも、こここの神社つてあんま参拝客こねえし。
つか管理人?的な人この近くに住んでねえしな。
よし、もう少し寝よう。

「・・・・・」

ん?なんだ?女の子の声?みたいなのがきこえるけど・・・。
まあ
真生か?にしては声が高すぎるよな?

んじゃあ、参拝客か。まあ木陰の裏手の方だし正面からじや見えんだろう。

とつか ・・

「ねえ、冬華。これなんだと思つ?」

「んー?和尚さん?」

「・・・あんたに聞いたあたしがバカだつた。」

ん？なんか声が近いんですけど・・・

「あつー。」

「うつー。

ぞばあああーー！

「冷たつ！……！」

なんで、こきなり俺の顔面に水が！？雨漏りか！？ふぞけんな！

「あつ、起きた。」

「す・・す・・すみません！…」

「あひやー、こつやシャワー浴びて服乾かさんと風邪ひくな・・・ん？」

俺の目の前には大荷物を抱えた一人の少女がいた。

一人はさつきから俺に謝っている黒髪に碧眼という神秘的な美少女。もう一人は白髪黒眼といついかにも2次元のお方ですか？？と思いたくなるような美少女。

てか双子！？

「「めんなさい！…」「めんなさい！…わたしがバケツを蹴つてしまつたばかりに！…」

「いや、俺は別に大丈夫だから・・・」

「そりよ、冬華。そもそもこいつがあたまの方にバケツおことくのが悪いのよ。」

あいか

「ダメだよ。・・・愛華あ。そんなことさせりゃあ・・・。」

なんなんだこいつら・・・?特に白髪の方すぐえこいつらへ。
まあそれより服乾かしてシャワー浴びんとな・・・

「んじゃあ、俺は家に帰るんで。」

やつこつて立ち去り立てるといふと、黒髪の方がこいつら並んで立ってきた。

「あの、よかつたらこれ使ひてください。」

親切だなあと思つて田を落として見ると

「?な?ですか?コレ?」

淡いピンク色で三角形のタオルなんて初めてみるなあ・・・・・・

「うわー冬華ーそれあなたの下着でしょー?」

え・・・・?」

「やだなあ、愛華。わたしがそんなものだすわけ・・・・・・せやー

――――――

・・・・・『』

「まひ、これ使になれ。冬華のだけど・・・・・・」

タオルを差し出されてしまった。普通なら遠慮するべきなんだろうけど、こじは素直に受け取つといづ。

「ありがとう。 んじゃ。」

簡単にお礼をいって足早に俺は自分の家にむかった。
ついてむこの神社の階段おりたらすぐなんだけじね。

帰る途中タオルを使わせてもらひた。

きれいな花柄のタオルで

なんつか・・・・すげえいい香りがした。

ちょっと幸せな気分になりながら俺は家にかえった

「ただいまー。」

誰もいないとしつていてもなんとなく言ひてしまつ。

親父の仕事で母も一緒にいってしまった。

つまりこの家には誰もいないはずなのだが・・・・・・

れい
れい

「お、零か。 お帰り」

かんざき まお

なんと迎えてくれたのは神崎 真生

あつ、真生は男ですよ。 浅田真 ではあります
てかあんた、不法侵入ですよ?・・・

「つか、鍵かけいたんだけど・・・まさかお前

「ああ、ピッキングしたから」

アウトおおおおおおおーーー!

「・・・まあ、いいか。」

真生はこんななんだけど俺の悪友だ。幼稚園からの付き合いだしな

小中高と一緒に過ごすんだ。

あつ、勘違いしないでね。

俺はノーマルですよ。

「何つたつてんの？」

こんな感じでいつも真生とあることをしています。

えつ？なにやつてるかって？それはまた後日とこいつじで。

数時間後

「じゃあな。また学校で」

「うー」

神社の前で真生をみおくつて

俺は神社に向かつた

なぜかつて？神社にいくことが癖になつてゐるのさ！

1日に3回くらいはいつてるからな・・・

あつ、一応タオルはもつてきます。いればいいんだけど観光客つぽかつたからなあ

こんなとこに観光しにくるのもどうかとおもつけど・・・

そんなことをかんがえていると階段を上り終わり、神社についた。

「あつー！」

いた。昼んときの双子。

二人は神社の小さな石段に肩を寄せて寝ていた。

俺は近寄つて腰を落としまじまじとみてみると
しかしホントにてんなーこいつら。

髪色と眼の色以外ほんと変わらんなー
体の凹凸まで・・・・

「ん？・・・・あんた昼間の・・・てかなにじろじろ見てんの？」

おお白髪が起きた。黒髪はまだねてんな・・・。

「ああ・・・・あつーそつこれ返そつかなと思つて。」

俺はタオルを差し出す

「礼はここの子についてやつて」

タオルを受け取りながらそつこつて白髪は黒髪を指差す。

「まあ、礼としちゃなんだがこの町のことくらいは知つてるからなんでも聞いてくれ。あんたら観光客っぽいし、宿とかに戻らなくていいのか？」

かんざき

「ああ、観光ではないんだけどね・・・あつーそうだ！あんた神社の近くの家の神崎って人の家知つてる？」

ん？神崎・・・えーと。

「それたぶん俺んちのことだと思つケド・・・」

「あ、そうなの？前にいたところの人のからその家にまづいけつて

いわれてるから・・・んじゃ悪いけど案内してくれる?」

変なフラグが立つた気が・・・いやあないないあるはずない

「ほりー・タ華ー・起きなさいー!」

「ん？ 何をする？ 」

「寝ぼけてないで行くわよ。行き先がわかつたわ。こいつんちよ」

すみません。指差さないでください・・・。
「ええ？あれ？この人どっかで・・・・あ・・・せつしきは「めん
なさい！」

顔をアヤシのよう赤くして謝りてくれる。

「んじゃ、とりあえず行こうか

「え・・・・・？」

この子話を聞いてたか?

「だからこいつたちってこいつらのやつだよ。」

!

「ただいまー」

まあ誰もいないんだけど・・・

「「おかれり」」

あれえーおかしいな幻覚&幻聴がきこえるんだけど

「残念ながら幻覚でもないし幻聴でもないんだなあ」

そこにはイケメンな俺の悪友がニヤッと笑っている。
でも、なんであいつ帰らしたのに・・・・。

「それは、私が呼んだんだ。」

ゆず

「柚姉えー..どしたの? ひこくるなんて?」

姉とわ言つても親戚の姉ちゃんで今年齢はたしか・・・

「零、 それ以上考へると成績オール1にするぞ!」

「うううううーー! めんなさいーー!」

きつとき

あきやくら

霧咲 柚 年齢20代半ば~後半で若くして俺と真生が通つて
私立秋桜高校の理事長様である。

「はい、お前オール1決定
なぜ、俺の心を読めるんだ!?
つか、大事なことわすれてた・・・

「柚姉<うめ姉>」の一人なんだけビ・・・・・

まなど

「ああ、愛斗さんから聞いてるぞ。冬華と愛華だろ」

愛斗つてのは俺親父ね。源氏名みたいな名前だけど本名だからね。

「いや、お前の名前も十分源氏名っぽいから。」

真生、てめえーにはいわれたかねえよー

「はいはい、そこまでだ悪ガキども。んで双子、なんでここにきた
か知つてこるのか?」

「いえ、あしたちはなにも・・・ここにくればわかるつて祖父母
にいわれてるので」

「なるほど、んじゃいい機会だし全員よくきけ、これから・・・
とりあえず2年間か?うちで雨宮 冬華と愛華の一人をこの家で預
かることになった。まあ家賃とか食費とかは主に雪野神社の巫女?
的な仕事をしてくれればいい。てなわけで仲良く暮らすよーに」

「・・・・・えええええ――――――――――」

俺、冬華、愛華の3人がキレイなはよもつて絶叫した。

「あつそれと真生もここで暮らすことになつたからな。まいつも
家にきてたから家人間みたいなものだしかまわんだろ。それと零
が双子を襲うかもしれんからな、見張りだ。それと私もここに住ま
わせてもらひうぞ。あまりかえつてこれないとおもうがな。」

「うせあんたはHロゲとか夜中理事長室でやつてんだろ。

「そんな話きてないですよー。」

愛華が俺と冬華の気持ちを代表して言つ。

「まあ理由はおいおい話すから。では私は夕飯の食材をかつてぐるからな」

そう言い残し柚姉えはいつてしまつた

「…………何かたまつてんのお前ら?」

逆にお前はすぐえ冷静だなおいー

「メンヂくせえがなるよつになつちまつたんだからしじうがねえだろ。それより自己紹介でもしどくか。オレは神崎 真生。不本意だがこいつの悪友だ。」

「不本意な奴でわるかつたな。俺は桐野 零。一応この家の住人です。」

「わたしの名前は雨宮 冬華だよ。よく『ふゆか』っていわれるけど『とうか』です。今後ともよろしくね」

「あたしは雨宮 愛華。双子だけ冬華の妹になるわ。よろしく。」

まあこんな感じで俺の平和?な日常が始まつていきます

・・・・・でか、俺の憩いの神社があああーーー

(後書き)

感想をくれると作者は大変よろこびます
連載ではさらに面白くしていきますのでぜひよんでもください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4564t/>

悪魔な天使と天使な悪魔（仮）

2011年10月9日04時02分発行